

七・八世紀におけるビザンツ中央政府の動向

——元老院を中心に——

はじめに

中 谷 功 治

ビザンツ皇帝とは、神の恩寵をうけた専制君主とされる一方で、合法的に擁立・改廃が可能な存在でもあった。国制上の建前において皇帝擁立の権利をもつのは、首都コンスタンティノープルの元老院と民衆そして軍隊の三者であるとされる。このような国制上の原則については、すでに二〇世紀前半にJ・B・ビュアリやCh・デールらの碩学によって確認されていた⁽¹⁾。ビザンツ独自のこの国制は、ローマ帝政以来の伝統を色濃く反映しつつ、四世紀以降の後期ローマⅡ初期ビザンツ時代に確立されていった。

筆者はこれまで、七・八世紀におけるビザンツ帝国の政治過程を小アジアのテマ軍団の動向を中心に考察してきた⁽²⁾。けれども、この国家にあつては時代を問わず首都コンスタンティノープルが圧倒的な存在感を示していたのも事実である。七世紀以降、帝国はその領土の半分以上を喪失し、従来どおりに万単位での人口を擁する都市として生き残ったのはコンスタンティノープルだけとなった。当然のことながら、皇帝を中心とする首都の政府は原則としてけつして政治の手綱を手放すことはなかったように思える。帝国中央における政権の存在は無視しえないのである。

そこで本稿では、この時期のコンスタンティノープルの動向に焦点をあてた考察を試みる。ただし、これまで繰り返し述べてきたように、七・八世紀は史料状況が特に劣悪であり⁽³⁾、それは首都であるコンスタンティノープルについてもさして変わることはない。そのことに十分配慮しつつ、まずは考察の足がかりとして、以下ではこの時代に首都の元老院がはたした役割を中心に考察をすすめることにしたい。

一 ローマ帝国と元老院

古代ローマの元老院ないし元老院議員は、帝政期に入っても元首との協調体制のもとで国家の統治において重要な役割をはたしたが⁽⁴⁾、三世紀の軍人皇帝時代にはその役割を大幅に減じることになった⁽⁵⁾。けれども四世紀の専制君主政期に入ると、新都コンスタンティノープルの創設に並行して、この地においてもローマとは別個の元老院が創設された。

ただし、コンスタンティノープルの元老院は、政府要人がその中核を占めていたとはいえ、全体としては元首政期のような政権運営の中枢を具体的に担う主体ではなくなり、おもに「承認」というかたちで皇帝政治を支える集団へと役割を変化させていった⁽⁶⁾。

六世紀に入ると、皇帝の即位式典は首都近郊のヘブドモン練兵場から、コンスタンティノープルの皇帝宮殿に隣接した馬車競技場のヒッポドロームに移る。ここでは元老院が選出した皇帝候補者が、集まった市民たちからの歓呼を受け、そして彼は晴れて皇帝の装束をまとうことができた。以上がH・G・ベックのいうビザンツ国制の成立であり、そこでの元老院は国制上の建前として不可欠の存在であり続けた⁽⁷⁾。

けれども、地中海世界にとって大きな転換期となった七世紀に入ると、武力による帝位の篡奪という事態が再発し

た。この時期以降、父から子へと比較的スムーズに権力継承がなされたのは、七世紀ではコンスタンティヌス二世→コンスタンティヌス四世→ユスティニアヌス二世の三代、八世紀ではコンスタンティヌス五世→レオン四世→コンスタンティヌス六世の同じく三代、それぞれ約五十年となる。それ以外の帝位交代時（十回以上ある）には、クーデタや反乱によって後継の皇帝が廃位されたり、排斥未遂の陰謀が繰り返された⁽⁸⁾。

さらに、上記の父子継承のケースにおいても、その背後では兄弟間の継承争いが頻発していた。コンスタンティヌス二世は弟テオドロシオスを殺害し、その子コンスタンティヌス四世も同様に弟二名の鼻を削いでおり⁽⁹⁾、さらにレオン四世の義弟たちを擁立しようとする陰謀も複数回におよんだ⁽¹⁰⁾。

このような動乱の時代に元老院はどのような役割を担っていたのだろうか。それを明らかにするため、次章では當時を知るための最重要史料である『テオフアネスの年代記』での元老院への言及例を確認してゆきたい。同時にこれらの情報との関連で他の史料に登場する元老院についても適宜参照し、七―九世紀初頭における元老院の動向を概観する。

二 『テオフアネスの年代記』と元老院

ディオクレティアヌスの即位年である二八四年からレオン五世が即位した八一三年までを扱う『テオフアネスの年代記』において、「元老院 *sykletos*」なごし「元老院議員 *sykletikos*」への言及は、六〇〇年以前が二六回、以後八一三年までが十六回ある。後者の期間について関係する出来事をまとめると、以下の〈表1〉のようになる（頁は『テオフアネスの年代記』のもの）。

表1 『テオファネス年代記』での「元老院」言及（六〇〇～八一三年）

①六〇二年		マウリキオス帝の近親者の葬儀に全元老院も聖使徒教会にて参加する	二八四頁
②六〇二年	○	叛徒フォールカスは元老院と総主教をヘブドモン練兵場呼び出す	二八九頁
③六〇八／九年	○	元老院はカルタゴ総督のヘラクレイオス（父）に救援を要請する	二九七頁
④六四一年	○	元老院はヘラクロナスとマルティナの母子を承認せず 新帝コンスタンス二世は元老院を前に演説し、贈り物を授ける	三四一頁 三四二頁
⑤六六八／九年	○	アナトリコイ軍団が首都対岸クリュソポリスに到来し共同統治を要請する 軍団代表者は元老院との議論に首都に入場するも捕縛・処刑される	三五二頁 ★
⑥七一五年		キュジコス府主教ゲルマノスの総主教就任の承認に元老院も加わる	三八四頁
⑦七一六年	○	テオドシオス三世が退位について総主教や元老院と相談する	三九〇頁
⑧七一八／九年	○	レオン三世の息子コンスタンティノス（五世）の洗礼に際し 「テマと元老院の指導者たち」が立ち会う	四〇〇頁 ★
⑨七七六年	○	レオン四世とその息子の子孫のみを皇帝とする宣誓に元老院も参加する （テマ將兵の首都集結と要求。他の宣誓者にタグマ、全市民、職人）	四四九頁 ★
⑩七八四年		総主教の後継者選定のためエイレネは元老院の主要メンバーを招集する	四五七頁
⑪八一一年	○ ○	ミカエル一世ランガベの皇帝擁立にタグマと全元老院が動く 十月二日ミカエル一世の即位に全元老院も立ち会う （他にバトリキオス、高位聖職者、司祭、修道士、貧民、市民たち）	四九二頁 四九三頁

〈○は政権への何らかの関与が、★は軍団としてのテマへの言及があることを示す〉

前述したように後期ローマ帝国における皇帝の専制君主化にともない、元老院は彼の施策についての承認団体として形式的な役割を担うようになったといわれる。実際、①を除いて、すべての言及が皇帝の即位や継承に関係するか、コンスタンティノール総主教の選出にかかわるもの⑥⑩であった。以下、②～⑪の出来事について簡単に確認してゆこう。

②六〇二年、反乱軍を率いて首都コンスタンティノープルに攻めのぼった軍人フォーカスは、前帝マウリキオス（在位五八二―六〇二年）の廃位を受けて、元老院・総主教を首都郊外のヘブドモン練兵場に呼び出した。これは、即位式を実施するためであるが、式典の会場が首都内の馬車競技場ヒッポドロームではなく、ヘブドモンで開催されるのは五世紀のゼノン帝以来であった。けれども、皇帝の正式な即位に際しては、軍隊だけでなく、元老院をはじめとする首都の人々がこれを歓呼するという慣例は守られた⁽¹¹⁾。

そのフォーカス帝の治世（六〇二―一〇年）は陰謀や外敵の侵入が多発化し、恐怖と混乱をもたらした⁽¹²⁾。例えば、廃位されたマウリキオス帝の皇妃コンスタンティナがフォーカス帝を排除する陰謀を画策したとして処刑され、これに彼女の三人の娘や多くの元老院議員が連座した⁽¹³⁾。

③そこで元老院は、カルタゴ総督のヘラクレイオスに密書を送って支援を要請した。その書面の差出人は皇帝の娘婿で、本来は後継候補者である親衛隊エクスクビトルの司令官^{コメス}プリスコであったという⁽¹⁴⁾。

やがて総督の息子で同名のヘラクレイオスが都に攻めのぼり、帝位がふたたび篡奪される。ヘラクレイオスは大宮殿内の礼拝堂で総主教セルギオスによって戴冠され、聖ソフィア聖堂で元老院と緑・青の両サーカス党派^{デーゼス}として民衆から歓呼を受けた⁽¹⁵⁾。ともかく、この六一〇年の政変の黒幕に首都の元老院関係者があったわけである。

④六四一年一月のヘラクレイオスの死去にともない、息子のコンスタンティノス三世とヘラクロナスが即位したが、間もなくコンスタンティノスが病死し、実権は少年ヘラクロナスを擁する皇后マルティナに移るかにみえた。けれども、元老院はヘラクロナスとマルティナの母子を承認せず、彼らを失脚させて、コンスタンティノス三世の息子コンスタンス二世を擁立した。

このようにして単独での統治を開始したコンスタンス二世（在位六四一―六八八）は、いまだ十歳ほどの年齢であったが、年代記は新皇帝が元老院への賛辞演説をし、多くの贈り物で名誉を与えたと伝えている⁽¹⁶⁾。

幼少の皇帝の演説は元老院による演出とみるのが妥当であろう。なお、ここでの後継者争いの過程では、元老院の他に首都の民衆や、その近郊に陣取るバレンティノス將軍率いる軍隊が関与していたことが史料からうかがえるが、最終的にこの將軍はコンスタンス二世に反乱を起こし、鎮圧・殺害された¹⁷⁾。

⑤六六八年、コンスタンス二世が遠征先のシチリア島で殺害され、新たに長男のコンスタンティノス四世（在位六六八年―八五年）が帝位を継承した。『テオファネスの年代記』では、その直後にアナトリコイの軍団^{テマ}が首都対岸のクリュソポリスに到来し、皇帝に対して弟二人との共同統治を要請したという。

將兵らに対して交渉に応じたのは、パトリキオス（高級爵位…カッコ内は中谷による、以下同様）でコロネア出身のテオドロスであった。テオドロスは彼らに要求事項については首都で元老院と相談して決定すべきであると提案し、指導者たちを町に引き入れた。しかし皇帝はガラタ地区に到来した指導者たちを捕らえて絞首刑に処したという。結局、失意のうちにアナトリコイの將兵たちは故郷に戻り、皇帝は彼の弟たちの鼻を削いだ¹⁸⁾。

以上七世紀の出来事からは、元老院が従来どおりの国制上の権能を保持しており②③⑤、さらには皇帝位のすげえに成功した事例もあることが判明する④。現職皇帝をその地位からひきずり降ろすという事態は、もしも本当に元老院が主体となって実施したのであれば、帝国史上でも異例である¹⁹⁾。

⑥『テオファネスの年代記』七四／五年の条によると、皇帝アナスタシオス二世（在位七三―七五年）はキュジコス府主教ゲルマノスをコンスタンティノール総主教へと異動させた。さらに年代記はこの措置はローマ教皇の特使を含む多くの聖職者たちに加えて、「聖なる元老院と神に守護されたこの帝都のキリストを愛する人々の選択と賛同」を受けて実施されたと述べている²⁰⁾。

このような首都の諸勢力の賛成や宣誓をとまう決定という形式は、この時期に何度か確認できる。皇帝の即位に關してのもの（以下に紹介する⑨や七九一年の皇母エイレネによるもの²¹⁾）以外では、たとえば、六八七年に皇帝ユ

ステイニアノス二世（在位六八五―一九五年）が教皇に送付した書簡において、六八〇年の公会議の決定を承認する人物や団体が登場するし^②、七六五年には皇帝コンスタンティノス五世（在位七四一―七五年）があらゆる人々にアイコン排斥の誓いを要求している^③。

また、総主教の選出に関係して元老院議員が登場するケースとしては、やはりエイレネ摂政期の記述^④がある。七八四年に総主教のパウロスが重篤な病のため引退を表明すると、エイレネは息子コンスタンティノス六世（在位七八〇―九七年）とともに彼を見舞い、さらにその場に「パトリキオスたちと元老院の主要メンバー」を集めた。死の淵にあつた総主教は公会議を開催してアイコンを復活させるように要請する。その後、エイレネはマグナウラ宮に全市民を集めて演説し、人々からは後任の総主教に帝国書記官のタラシオスが一致して推薦される。以上のような経緯をへて七八四年十二月二五日にタラシオスが総主教に選出され、アイコン復活のための公会議の準備が始まるのである^⑤。

⑦さて、七世紀末から八世紀初頭にかけては政權交代が何度もくりかえされたが、その最終段階、テオドシオス三世（在位七一五―一七年）の統治に反抗するアナトリコイ軍団^{テマ}の將軍（ストラテegos）レオン（後の三世）は、首都へ向かつて進軍した。レオンの軍勢はニコメディア付近において「皇帝の息子とその全側近および宮廷の高官たち」を捕虜にした。イスラーム側の陸海軍が小アジアで越冬して翌年の首都攻撃を準備するなか、レオンは首都対岸のクリュソポリスに到着する。皇帝テオドシオスは総主教ゲルマノスと元老院と相談し、「総主教を通じて、彼が害されないことと教会が乱されないことの宣誓をレオンから受けて」退位した^⑥。

ここにふたたび皇帝の改廃に関係して元老院が登場する。総主教のゲルマノスも協議に参加しているので、実質的な話し合い、ないし皇帝への退位勧告がなされたのかもしれない。もちろん、実際に関わったのは元老院議員全員ではなく、その代表＝政府要人たちである可能性が高いだろう。

⑧レオン三世（在位七一七―四一年）の即位と首都包囲戦の記述に続いて『テオフアネスの年代記』は、新皇帝に

長男が誕生したことを伝えている。後のコンスタンティノス五世であるが、総主教ゲルマノスによるコンスタンティノス洗礼に際して、幼児を「テマタ（軍団^{テマ}の複数形）」と元老院の傑出した人々が受け入れた」とある（コンスタンティノスの共同皇帝への就任は七二〇年⁸²⁰）。

その後、元老院への言及は半世紀以上とだえる。その背景としては、この時期における史料の残存状況も考慮しておく必要があるかもしれない。ただし、七四一年に勃発したアルタバストス反乱に際しては、首都での彼の即位やその後の首都争奪戦があり、史料も比較的詳しく事情を語っている。にもかかわらず総主教を除くとそこに元老院や首都要人は一切登場しないことは注目してよいように思う。ともかく、次に元老院が登場するのはコンスタンティノス五世の長男レオン四世（在位七五―八〇年）が単独統治者となった直後の七七六年のことであった。

⑨レオン四世は「属州軍^テと近衛連隊^グの兵士を増強した」（読み方には諸説がある）。このことはテマの将校^{アレク}たちを奮起させ、彼らは多くの兵士たちとともに全員が町に入り、レオンに息子コンスタンティノス（六世）を皇帝位につけるように求めた。しかし彼は次のように答えた。「これは私の一人息子だ。お前たちのもとめるとおりに息子を共同皇帝にすることを私がおそれるのは、私の身に人間の定めである死がおとずれて、もしお前たちが、残された幼いわが息子をあやめ、他の者を皇帝にしたなら、と心配するからだ」（渡辺金一訳）。しかし、彼らはレオンに対し、彼の息子以外のだれも皇帝にはしないと保証すると約束した。人々がヒッポドロームに集まり、このことを枝の主日（復活祭前の最後の日曜日）から木曜日まで要求したので、皇帝はすべての者にそのことを十字架にかけて宣誓するように求めた。そこで「テマ、元老院、内なるタグマ、全市民、そして職人たちは、レオン、コンスタンティノス、そして彼らのタネ以外の誰も皇帝として受け入れないと、尊く命を与える木にかけて誓った」⁸²¹。

私見であるが、テマ将兵の上京と皇帝への要求という事態は、皇帝側の明らかな「やらせ」であろう。年代記は復活祭当日のヒッポドロームでの若いコンスタンティノス六世の戴冠について詳細に述べているが、それに続いてはレ

オン四世の異母兄弟たちによる陰謀發覺と処罰について伝えている。こちらでもうちあげであつた可能性がある。ともかく、またしても皇帝の後継者問題に係り、元老院とともにテマの將兵が登場した。

⑪八一年九月、ブルガリア遠征中にニケフォロス一世が戦死し、息子で共同皇帝のスタウラキオスも重傷を負つて首都に帰還した。

十月一日夕刻の謁見後、皇帝をみかぎることを決意したスコライ連隊長^{ドメステイコス}ステファノスは「夜を通して生き残っている近衛連隊^{タグマ}の兵士たちと味方の將校たちを屋根付きの競技場に集めて、ミカエル（一世ランガベ…ニケフォロス一世の娘婿）を皇帝に歓呼させた。夜明けには全元老院が宮殿に赴いてミカエルを皇帝と歓呼した」。すなわち、「敬虔なるクロパラテス（皇族の爵位）のミカエルがヒッポドロームでローマ人の皇帝に全元老院とタグマによって宣言された。ミカエルの歓呼を聞いて、スタウラキオスはただちにみずから剃髪し、親戚の修道士シメオンを通じて修道服をまとつた」。

この後、新帝ミカエル一世（在位八一—一三年）は聖ソフィア聖堂の説教壇で総主教ニケフォロス一世（戦死した皇帝とは別人）によつて加冠され、聖職者たちに金銭を贈与した。さらにミカエル帝は妻をアウグスタに戴冠させ、元老院に贈り物をなした。同様に皇帝は遠征でテマ兵士である夫を失つた未亡人たちにも弔慰金を渡した上に、「全てのパトリキオス、元老院議員、高位聖職者や司祭、修道士、兵士、そして貧民を、帝都とともに属州^{テマ}においても人々を豊かにした」という⁸⁸。

以上の記事では、まず新帝ミカエルは軍隊によつて歓呼されているが、今回は属州^{テマ}軍ではなく首都付近に駐留する近衛連隊^{タグマ}の連隊長と將兵が関与していた。年代記の記述の後半部分では、税務長官出身のニケフォロス一世の吝嗇に對比して、新皇帝の氣前の良さが強調される。ここで注目しておきたいのは、史料に登場するテマは、戦死した兵士との関係および首都と対をなす地方Ⅱ「属州」という意味で使用されていることである。

三 ニケフォロスの『簡略歴史』と元老院

『テオファネスの年代記』とならぶ重要史料、総主教ニケフォロス一世の『簡略歴史』（六〇二―七六九年を扱う…注(17)参照）においては、元老院への言及はわずかに四回のみである。それらを列挙しておく。

(a) 六一〇年のヘラクレイオス帝の即位時。「ついにヘラクレイオスは元老院とデーモス²⁸⁾によつて皇帝と宣言され、主教（＝総主教セルギオス）によつて帝冠を授けられた」（ch.21.7）。

(b) 同じくヘラクレイオス帝の治世。皇帝は息子コンスタンティノス三世を洗礼させ、「元老院の全ての者たちと町に残っている人々を主教セルギオスとともに集め」、彼らに証人となるよう求めた（ch.21.33）。

いこで言及される全元老院議員と首都の人々は、先に述べた七一八年頃のコンスタンティノス（五世）の洗礼のケース^⑧（テマと元老院の傑出した人々）と対比することができるかもしれない。

(c) 八世紀初頭に帝位に返り咲いたユステイニアノス二世（再統治…七〇五―一一年）は、ケルソンへの懲罰遠征を準備した。出征した兵士たちは、「農民や職人たち、そして元老院や町（コンスタンティノープル）のデーモスカ^{らも}」徴募されたところ^⑨（ch.45.1.6）。

(d) ユステイニアノス二世から帝位を奪ったフィリッピコスⅡバルダネス（在位七一―一三年）の支持者として挙げられているのが、「当時、都市の司祭長（＝総主教）のヨハネスとキュジコス府主教のゲルマノス、そして他の司祭たちと多くの元老院議員たちである」（ch.46.1.7）。

以上である。残念ながら、あまりコメントができるほどの情報量ではない。

四 コンスタンティノープル元老院の動向

『テオファネスの年代記』や『簡略歴史』からの情報はかぎられており、そこから何らかの傾向をひきだすことはかなり困難である。ここでは、あくまで印象的なレベルにおいて、いくつかの点を確認するだけにとどめたい。

まず、七世紀中頃まで、元老院は帝国の政治において無視できない役割を演じていたようである。とりわけ、六四一年のヘラクレイオス帝死後の後継者をめぐる争いにおいては、彼らは最終勝利者であったかのように記されている。実際、当時の元老院の役割を高く評価する研究者たちもいる⁽³¹⁾。

ただし、史料での言及例の大半では元老院は全体として、つまり集団として登場する。その役割としては、団体として一致するという形式が重要であったのだろう。もちろん、政治の実権は、かぎられた少数の政治家たちが掌握していたと推測されるが、史料からその実態をつかむことはむずかしい。

以上との関係で注目すべきは、七世紀中頃から後半にかけて、ヘラクレイオス帝から帝位をうけついで子孫たちの治世がいずれも若々しいものであった点である。コンスタンス二世は即位当時十歳ほどであり、さらに成人後十年ほどたった六六一年には西方に長期遠征して、六六八年にシラクサで暗殺された。コンスタンス二世をついだ長男コンスタンティノス四世は、帝位継承時は十八歳ほどの若者であった。イスラーム勢力による五年におよぶ首都封鎖を経て、六八五年に皇帝は死去するが、いまだ三十代なかばであった。結果として、彼の長男ユスティニアノス二世も十七歳ほどで政権をゆずりうけ、その十年後にクーデタによって政権を追われた。

少なくともコンスタンス二世の最初の十年、皇帝が西方へ移動したあと息子コンスタンティノス四世が成人するまでの約十年、そして孫のユスティニアノス二世の治世の最初期、これら七世紀の中盤から後半の五十年間の約半分は

皇帝専制というのは名目にすぎず、実際の政務は、政府中枢の実力者たちによって運営されていたと考えられる。

例えば、コンスタンス二世が妻子たちを西方遠征に随行させようとしたとき、侍従（クビクラリオス）のアンドレアスとパトリキオスであるコロネイアのテオドロスがこれを阻止したという³³⁾。そして、五年以上におよぶ皇帝不在中、アルメニアコイ軍団の將軍（ストラテegos）のサボリオスが反乱を起こし、使者をカリフ、ムアーウィアのもとに派遣して支援を求めた。このときコンスタンティノーブル側を代表し、ダマスカスにおもむいて交渉にあたったのは、上記の侍従アンドレアスであった³³⁾。さらに元老院への言及がある（表1）⑤の事件、首都にせまるアナトリコイ軍団の將兵との交渉役をつとめたのも、前述コロネイアのテオドロスであった。もしも、この事件が起こったのが一部の研究者が想定する六八一年であるならば、同時期に開催された第六回の全地公会議の議事録に政府閣僚の第二位に署名を残す、パトリキオスでオプシキオン軍団の司令官³⁴⁾にしてトラキアの將軍（hypostrategos）のテオドロスとは、このコロネイアのテオドロスと同一人物である可能性が高くなる³⁴⁾。

残念ながら、史料からの情報は乏しく、侍従アンドレアスやコロネイアのテオドロスのような具体的に政務を担当したであろう要人をほかに確認することは困難である。それでも、年若い皇帝を支え、元老院を構成する重臣たちの存在を想定することは乱暴な推測ではないだろう。

もう一点、〈表1〉のデータの時期分布において注目したい点がある。それは、前述したようにレオン三世の即位前後からレオン四世の即位直後までの半世紀以上にわたって元老院への言及が途絶していることである。

七世紀の後半には若い皇帝の治世が続いたが、八世紀の場合には成人として帝位を継承したコンスタンティノス五世が三十年を越える長期政権を維持した後に、七世紀と同じく若い政権が続くことになった。すなわち、七七五年にレオン四世が二五歳で即位し五年後に死去、十歳ほどのコンスタンティノス六世が即位した。十年間にわたる母親エイレネの摂政期をへて、コンスタンティノスは親政を開始するが、三十歳を待たずに彼は失脚した。

けれども、八世紀のレオン三世・コンスタンティノス五世・レオン四世の三代においては、元老院議員クラスの中
央政府の要人の活躍は史料から読みとれない。しかも、⑧や⑨の新皇帝の後継者指名に関係する出来事には、元老院
に加えて、そして元老院よりも先にテマの要人や将兵が言及されている。

テマに関していえば、元老院とともにテマが登場するのは上記のもの二度だけであるが、別稿で確認したよう
に³⁵⁾、八世紀から九世紀二〇年代にかけての時期においては、テマ軍団やその將軍たちが必ずといっていいほどに皇
帝の交代時期に史料に登場する。

以上二つの注目点の意味するところとは何であろうか。残念ながら、あまり確かなことはいえそうにない。ではあ
るのだが、レオン三世からレオン四世にかけての半世紀間の元老院への言及の一時的消滅とテマ軍団の前面への登場
という事実は、八世紀におけるテマ軍団の優位という実態を支持するような印象をあたえる。筆者は、八世紀のいわ
ゆるイサウリア王朝期に小アジアのテマ諸軍団が政権を下支えしていた、という「テマ連合政権」説を主張してきた
が、本論での分析はこの仮説に大きく矛盾することはないように思う。

一方、七八〇年以降、エイレネが政務を担当した時期からニケフォロス一世の治世においては、小アジアを中心と
するテマの勢力に対して、中央政府の側からの巻き返しがあったという筆者のもう一つの仮説とも明白な矛盾は見ら
れない³⁶⁾。実際、ニケフォロス帝を継いだミカエル一世ランガベの即位時には、擁立にかかわった軍事力はテマでは
なく近衛連隊のタグマであった。そして、その直後にミカエルを皇帝として歓呼した人々の列にテマの将兵は登場し
ないことも指摘しておきたい。

おわりに

英国の著名なビザンツ史家M・アンゴールドは、最近発表した論考において七世紀末から八世紀初頭にかけての国家的な危機における帝国の政治プロセスの分析を試みている。テーマを中心とした属州の軍隊の重要性に言及しつつも、彼がこの論文で注目したのは首都の勢力であった。具体的には、ビザンツの政治プロセスは首都の三つの要素の關係に依存していた、とアンゴールドは主張する。すなわち、政治の中心にある皇帝一族と首都の元老院、そして総主教を中心とした教会勢力である⁸⁷⁾。

アンゴールドは、元老院として総括して呼ばれる人々を、首都コンスタンティノープルの政治エリートとみなし、乏しい史料記述のなかから具体的な事件や人物を拾いあげて、彼らの皇帝や総主教との關係をあとづけようと試みている。

本稿は、アンゴールドとは手法を異にして、二世紀以上にわたる時間枠のなかで、元老院という団体の動向のみに焦点をしばって考察した。そこから引き出されたものは、いまだ印象ないし傾向といった域を出るものではない。アンゴールドが指摘するような視点にたつて、首都の政治エリートたちの役割——本稿ではコロネイアのテオドロスと宦官アンドレアスの二名に言及したのみである——や、第二章の記述においてたびたび姿を見せるコンスタンティノール総主教の動向について、あらためて考察する必要がある。今後の課題としたい。

注

- (1) Bury, J. B., *The Constitution of the Later Roman Empire*, Cambridge/ New York/ Putnam, 1910, pp.1-49.; Diehl, Ch.,

Le Sénat et le Peuple Byzantin aux VII^e et VIII^e siècles, *Byzantion* 1, 1924, pp.201-213.

- (2) 拙稿「テマ反乱とビザンツ帝国―「テマ」システム」の展開―」(『西洋史学』一四四号、一九八七年、二二―四〇頁)から「ビザンツ艦隊をめぐる考察―七世紀後半―八世紀初頭を中心に―」(『史林』九四―四、二〇一一年、七―一八頁)まで。
 - (3) 八世紀から九世紀前半についてはあるが、史料状況の劣悪なについては、Anzély, M.-F., *State of Emergency* (700-850), in Shepard, J. (ed.), *Cambridge History of the Byzantine Empire c.500-1492*, Cambridge, 2008, pp.251-255°
 - (4) 南川高志『ローマ皇帝とその時代 元首政期ローマ帝国政治史の研究』(創文社、一九九五年)。
 - (5) 井上文則『軍人皇帝時代の研究 ローマ帝国の変容』(岩波書店、二〇〇八年)。
 - (6) 後期ローマ帝国時代におけるコンスタンティノープルの元老院については、さしあたりF・ティンネフェルト『初期ビザンツ社会―構造・矛盾・緊張―』(弓削達訳、岩波書店、一九八四年)第二章を参照。cf. Tinnefeld, F., *Die frühbyzantinische Gesellschaft: Struktur-Gegensätze-Spannungen*, München, 1977.
 - (7) Beck, H.-G., *Senat und Volk von Konstantinopel, Probleme der byzantinischen Verfassungsgeschichte*, Bayerische Akademie der Wissenschaften, phil.-histor. Klasse, *Sitzungsberichte*, Heft 6, 1974, S.3-75. このベックの所説については、渡辺金一氏が『コンスタンティノープル千年―革命劇場―』(岩波新書、一九八五年)においてくわしく紹介している。なお、儀式としてはその後、舞台は近くの聖ソフィア聖堂へと移り、新皇帝はコンスタンティノープル総主教によって加冠され、正統信仰を宣誓する。
 - (8) 拙稿「レオン三世政權とテマ」『関西学院史学』三八号、二〇一一年、一―二七頁。
 - (9) Boor, C. de (ed.), *Theophanis Chronographia*, vol.1, 1883, Leipzig (以下、*Theophanes と略記*)、pp.347, 351, 352, 360.
 - (10) cf. Mango, C. & R. Scott (eds.), *The Chronicle of Theophanes Confessor: Byzantine and Near Eastern History, AD 284-813*, Oxford, 1997, pp.485, 490, 492, 502. なお、皇帝位の継承や王朝形成については、ダクローンの次の研究が重要。Dagron, G., *Emperor and Priest: The Imperial Office in Byzantium*, (tr.) J. Birrell, Cambridge, 2003. (original edition: *Empereur et prêtre: Etude sur le "ésaropapisme" byzantin*, Paris, 1996.)
 - (11) 拙稿「八世紀後半のビザンツ・エイレーネー政權の性格をめぐる―」『西洋史学』一七四号、一九九四年、三六―五三頁を参照。ただし、宮廷内での陰謀事件は、この国にあつてはいつの時代にも存在する現象であった。
- 小林功「フォールカスとデーモス」『古代文化』六二―三、二〇一〇年、四四四―四五〇頁。

- (12) Charles, R. H. & D. Litt (tr.), *The Chronicle of John, Bishop of Nikiu*. translated from Zotenberg's Ethiopic Text, London, 1916, rep., Merchantville NJ, 2007, chs. 104–105, pp.166–167.
- (13) Dindorf, L. (ed.), *Chronicon Paschale*, Bonn, 1832, pp.696–7, 699. cf. Whitby, Michael and Mary, (trs.) *Chronicon Paschale 284-628 AD*, Liverpool, 1989, p.145–6; *Theophanes*, pp.291–293, 295; Boor, C. de (ed.), *Theophylact de Simocatta, Historiae*, Leipzig, 1887, 8, 15. 1. cf. Whitby, Michael & Mary, (trs.), *The History of Theophylact Simocatta*, Oxford, 1986, p.234. cf. Herrin, J., *The Formation of Christendom*, Princeton, 1987, p.188.
- (14) *Theophylact de Simocatta*, 8, 15.8–9; *The Chronicle of John*, ch. 107, 12–13; 20, ch. 108.1–12. cf. Herrin, op. cit., p.189.
- (15) *Theophanes*, p.299; *Chronicon Paschale*, 701 (戴冠場所は聖ソフィア聖堂となつてゐる); *John of Nikiu*, ch. 109, 25. cf. Herrin, op. cit., p.191. なお「デーモス」とは、直訳では首都の民衆だが、実際には馬車競技の応援団であり、当時は「緑」と「青」の二組が存在してゐた。このデーモスは古代末期より首都の民衆の意向を表明する勢力となつており、数多くの首都騒乱を煽動・教唆した。またデーモスは首都防衛に際しては民兵の役割も果たした。一般に研究史上では彼らは「サーカス党派 circus factio」と呼ばれる。いずれにせよ、このデーモスも有力な首都勢力のひとつと見なすことができ、その積極的な活動は八世紀初頭を最後に見られなくなり、九世紀以降はその長は国家官職として、式典などにおいて決まった役割を演じるものになつた。cf. Cameron, Alan, *Circus Factions*, Oxford, 1976.
- (16) この事件のあらましについては、渡辺金一、前掲書、一三二―一三六頁、さらに井上浩一『ビザンツ皇妃列伝 憧れの都に咲いた花』(白水社、二〇〇九年・初出は筑摩書房、一九九五年)第三章後半に詳しい。cf. Treadgold, W., *A Note on Byzantium's Year of the Four Emperors (641)*, *Byzantinische Zeitschrift* 83, 1990, pp.431–433.
- (17) *Theophanes*, p.341, 343; Mango, C. (ed./tr.), *Nikephoros Patriarch of Constantinople, Short History*, Washington DC, 1990, ch. 28–32. cf. Martindale, J. R. et al. (eds.), *Prosopography of the Later Roman Empire*, vol.III, AD 527–614, Cambridge, 1992, (Valentinus 4 & 5), pp.1353–5. Kaegi, W. E, Jr., *Byzantine Military Unrest: An Interpretation*, Amsterdam, 1981, pp.154–158; Stratos, A. N., *Byzantium in the Seventh Century*, vol.2: 634–641, (tr.) Hionides, H. T., Amsterdam, 1972, pp.189–194.
- (18) 拙稿「レオン三世政權とテマ」四頁参照。しかし、この時点でコンスタンティノス四世の二人の弟はすでに戴冠されてお

り、形式上であれ共治帝の地位にあった。研究者たちは、両名が排斥されたのは六八一年夏であり (*Theophanes*, p.360) アナトリコイ軍団による示威活動もこの頃と考えている。

(19) cf. Herrin, J., *op. cit.*, p.216.

(20) *Theophanes*, pp.384-385. cf. Mango & Scott, *op. cit.*, pp.535, 536 n.1. ゲルマノスの総主教就任に際の詳細が記録されている理由は不明であるが、彼が先代の皇帝バルタネス・フィリッピコスの異端的信仰 (単意論) を支持して出世した (*Theophanes*, pp.362, 382) 経歴を有するため、この抜擢には反対意見があったのだろうか。

(21) *Theophanes*, pp.465-466.

拙稿「レオン三世政権とテマ」五頁参照。そのなかには元老院も登場する。

(22) *Theophanes*, p.437. cf. Mango & Scott, *op. cit.*, p.439 n.4.

(23) 『タラシオス伝』では彼の職掌は筆頭書記官で、さらに総主教パウロスが後任にタラシオス (さらにニケフォロス) を指名したとある。cf. Ethymiadis, S. (ed./tr.), *The Life of the Patriarch Tarasios by Ignatios the Deacon*, Aldershot et al., 1998, §6, p.75; §12, p.82; Mango & Scott, *op. cit.*, p.631 n.4. なお、俗人であるタラシオスを総主教に抜擢した) ことにはローマ教皇なども含めて聖職者の一部から反対があった (それは彼の後継者ニケフォロスにもあてはまる)。

(24) *Theophanes*, p.390. 拙稿「レオン三世政権とテマ」一二―一三頁。

(25) *Theophanes*, p.401.

(26) *Theophanes*, p.449. 渡辺金一、前掲書、一三八―四一頁。なお渡辺氏は、このときにテマ將兵が首都にあったのは「もちろん、たまたま首都に来ていた」(一三八頁)と述べているが、年代記の記述からは私にはそうは思えない。拙稿「テマ反乱についての覚え書」『関学西洋史論集』三五、二〇一二年、六三―七四頁。

(27) *Theophanes*, pp.492-493, 494.

(28) Mango の英語訳では、(a) (c) のテーマスは「住民 population」と訳されている。

(29) 『テオファネスの年代記』では徵募ではなく軍資金の調達となっている (*Theophanes*, p.377)。

(30) Diehl, *op. cit.*, pp.207-209; Herrin, *op. cit.*, p.215-6. なお、渡辺金一氏は元老院に加えて民衆の役割を重視する。渡辺、前掲書、一三二―一三七頁。

(31) *Theophanes*, p.351. 別の箇所では首都住民の反対によるとされている (*ibid.*, p.348)。

- (33) *Theophanes*, p.349.
- (34) Riedinger, R. (ed.), *Concilium universale constantinopolitanum tertium*, Berlin, 1992, (*Acta conciliorum oecumenicorum*, ser.2, v.2), pars 1. Concilii actiones I-XI, pp.14, 20-21 etc.
- (35) 拙稿「テマ反乱についての覚え書き」第四章などを参照。
- (36) 拙稿「八世紀後半のビザンツ・エイレレーネー政権の性格をめぐって」を参照。
- (37) Angold, M., *The Byzantine Political Process at Crisis Point*, in Stephenson, P. (ed.), *Byzantine World*, London/New York, 2010, chapter 1, pp.5-21.